

ローカルヒーローの展開に関する試論

概念と活動の変化について

石井 龍太

要 旨

地域キャラクターの一類型であるローカルヒーローについて、1980年代以降の歴史的展開について概観した。ローカルヒーローにおける主な特徴として、名称、ステージショー、地域色を取り上げ、それぞれの要素が何時ごろどのように登場し展開したのかを分析した。80年代前半までにこうした特徴は大手テレビヒーローのステージショーや自主制作映画、コスプレイヤーの活動の中で育まれ、2000年代前半までに現在に繋がるローカルヒーロー活動が始まったと考えられる。そして数の急増と共に、2000年代後半以降は多様化し、それまでの概念を覆す活動例が登場して、今日に到ると考えられる。

キーワード：ローカルヒーロー、歴史、概念、活動

1. はじめに

「ローカルヒーロー」と呼ばれるキャラクターコンテンツが存在する。一般には「ゆるキャラ」などと同じ地域キャラクターの一つとされ、実際に一緒に活動するケースも見られるが、活用の幅広さをはじめ様々な特徴を持ち、他の地域キャラクターと一線を画す存在といえる。

現在は全国で200を超える団体が活動しており、その活動母体や活動目的は多様である。地域の催事でのステージショーやグリーティング（練り歩き）を主たる活動に位置づける例が多いが、テレビ・劇場などでの映像作品の放映、演劇、グッズ販売、教育、清掃や防犯などの啓発運動、式典への参加、チャリティをはじめとする災害支援等々、活用可能性も幅広い。また多様化を反映しつつ自身の活動内容を明示する等の意図を込めて、「インディーズヒーロー」「オリジナルヒーロー」「エリアヒーロー」「Jヒーローズ」「リアルライフヒーロー」など、様々な呼称も登場し、

ローカルヒーローを取って名乗らない団体や活動も見られるようになっている。

ローカルヒーローの数は増加の一途を辿り、活動内容も幅を広げ続ける一方で、ローカルヒーローを巡る環境は楽観視できない状況にあり、運営に課題を抱えている団体は少なくない。特に資金面や人材面における課題は団体を超えて全体に広く存在し、運営に困難を覚える団体は多い。それでも創意工夫と挑戦を重ね、数十年の歴史を紡いで今日に至る。本稿は、こうしたローカルヒーローの展開について、概念と活動の変化を中心に概観することを目的とする。

2. 先行研究

2-1. 概要

ローカルヒーローに関する先行研究のうち、前号（石井 2017）までにまとめたものについては割愛し、本稿の内容と直接関わりのあるものに限定して取り上げる。

ローカルヒーロー全体の流れを最初に取り上げたのは、2006年刊行の『ローカルヒーロー大図鑑』である。本書はローカルヒーローを網羅的に取り上げた書籍であり、概ね70年代から2005年までに結成され活動していたローカルヒーローから77組を取り上げ、そのデータを基に「年表〈ローカルヒーローの歩み〉」を作成し掲載している。この年表では、1970年代から90年代前半を「ローカルヒーロー現る」、90年代後半を「ローカルヒーローの夜明け」、2000年代前半を「ローカルヒーロー急増」と「広がるローカルヒーロー」に分けて概説している（ブルー・オレンジ・スタジアム 2006）。

『ローカルヒーロー大図鑑』に続いて2013年に刊行された『超ローカルヒーロー大図鑑』（ローカルヒーロー研究会 2013）では、『ローカルヒーロー大図鑑』を踏まえ比較しながら、「ローカルヒーローに見られる近年の傾向」と題し2000年代後半から2010年代前半までの傾向を指摘している。論点は幾つも提示されており、まずこの間に登場した新興団体を「新世代ローカルヒーロー」とし、その台頭と共に2000年から2005年までに結成された「旧世代」が人数やコスチュームを刷新しているとする。またこの間に集団タイプの「戦隊」から一人で構成される「単体」へのシフトチェンジが進行したとし、その理由として多くの人数を揃える必要性が低くコスチュームも基本的には一人分でもよい、個人レベルで始動するケースが増えているといった、人手を巡る経営上の課題を指摘すると共に、現在の担い手が子供の頃に観ていた大手テレビ番組のヒーローも要因として考えられるとしている。そしてテレビドラマが制作されメディア進出の活躍が増えていることも新しい傾向として指摘している（ローカルヒーロー研究会 2013: 130-132）。

なおこの二つの図鑑が刊行された間の時期に当たる2008年には『ローカルヒーロー大百科』と題するDVD作品が発売されており、日本各地から6つの団体が取り上げられている

(SION/TC エンタテインメント 2008)。この当時既に進行しつつあった多様化の動きを反映し、地域の青年部による活動の模様や、劇団運営のコミカルなヒーロー、戦闘シーンのないロックバンドヒーロー、アトラクションサークルによるヒーローといった様々な活動が紹介されている。また団体によって紹介のトーンが異なり、手作り故の「不出来さ」を強調する紹介もあれば、造形やアクションのクオリティが高く多数のステージやテレビ放送も果たしているヒーローを、「ローカルヒーローを超えたローカルヒーロー」や「本格派ヒーロー」と呼称する紹介も見られる⁽¹⁾。

この他、ローカルヒーローのイベントとして最大規模を誇る「日本ローカルヒーロー祭」(千葉県千葉市)では、年々増加し現在では100を超える参加団体の詳細を記載したパンフレットが毎回発行されており、年を追って比較することでここ数年の全体動向を把握することが可能である(ヤツルギ魂編 2015, 2016, 2017, 2018)。

そして個別の団体の歴史についてまとめた書籍も少数ながら刊行されている(海老名 2009, うるの 2013, 山口 2013, 井上 2017, 特定非営利活動法人 HERO 2017)。活動の中で生じる様々な課題を乗り越え、ローカルヒーロー運営のビジネスモデルの実践例や舞台裏を描いたもので、研究資料としても、実際に運営する際の参考書としても、貴重な情報源となっている。

2-2. 石井研究室の活動

筆者はローカルヒーローの活動に興味を持ち、2014年から本格的な情報収集を開始し、2015年度からはゼミ生達と実際に運営する実践活動を行ってきた。その成果として、ローカルヒーローの分類(石井 2015)、主たる活動の一つであるステージショーの分析(石井 2016)、筆者の指導するゼミ活動を通じた教育効果の検証(石井 2017)、団体を超えたコラボ活動に関する分析と考察(石井 2018)といった内容に関する複数の研究ノートを上梓してきた。

加えてローカルヒーローの運営者に対するインタビューをまとめた「ローカルヒーロー通信」(城西大学経営学部石井龍太研究室 2016a, 2016b, 2017)の作成を行っており、上述した団体史を掘り下げる内容を研究室から発信している。2018年2月には城西大学紀尾井町キャンパスにて、公開講座『城西エクステンションプログラム』の一環として、企業展示会と公開講演会を組み合わせたイベント『ローカルヒーロー博覧会』を開催した。

このうち、本稿と特にかかわりを持つのが、ローカルヒーローに対する認識と現状についてまとめた研究ノート「多様化するローカルヒーローの現状と課題」(石井 2015)である。2015年時点で収集できた情報を元に、主に地域色の度合いに基づき大きく4つの類型に分類した。すると**類型①【食料品や名産物など、地域を直接連想させる要素を名称などの設定に盛り込んだもの】**が最も多いものの減少傾向にあり、2010年代には**類型②【地域の要素を内包するが表に出さず、**

背景に留めたもの】の方が多くなる年も見られるようになること、すなわちローカルヒーローがその大きな特徴としてきた地域性が希薄になる「ローカルヒーローの地域離れ」が進行していることを指摘した。

3. 分 析

本稿では、1980年代から2010年代後半までの時期におけるローカルヒーローの史的展開について概観する。なお上述の通り、団体によっては「ローカルヒーロー」以外の呼称を用いる例も見られるが、本稿ではこれらの活動も含め、地域を拠点とし、ステージショーを主たる活動の場として位置づける一連の活動の総称として「ローカルヒーロー」の用語を用いることとする。

3-1. ローカルヒーローのはじまり

ローカルヒーローを巡る議論において、原点の問題は注目されてきた。インターネット上では1970年代後半から80年代前半に活動が始まるとする情報が多く、上述した『ローカルヒーロー大図鑑』の記述も同様で⁽²⁾、本書が読まれることでさらなる情報拡散につながっていると推察される。

一方で、定義の問題もあるが、原点と指摘される活動と現在のローカルヒーロー活動との間にはかなり相違点が存在し、また活動内容も含めて複合的な検討が必要と考える。本稿ではローカルヒーローを構成する要素として「名称」「地域性」「ステージショー」を取り上げ、それぞれの要素の原点となる活動を探り検討することとする。

名 称

「ローカルヒーロー」という名称の発祥は、初期のローカルヒーローとして取り上げられる事例の中で比較的記録が残っている、自主制作映画に登場したヒーローだとされる。中でも鹿児島県にて1984年に制作された「爆煙仮面カゴシマン」はしばしば取り上げられる。この作品は、大学生による特撮映画制作団体「鹿児島特撮映像研究団体（鹿特体）」（「オモチャキッド」制作スタッフ BLOG 2005a）が1984年に制作したという。制作団体のスタッフは、後年記したブログにて、「制作当時はもちろんローカルヒーローという言葉は無く、自主制作ヒーローと呼んでおりました。が、実はこの映像作品の予告編で「闖え！ ぼくらのローカルヒーロー」というキャッチコピーを使っています!! これは私自身が米映画「ローカルヒーロー」からヒントを得て付けたコピーでした。その後、2000年頃からでしょうか、よくローカルヒーローという言葉聞くようになった気がします。」としている（「オモチャキッド」制作スタッフ BLOG 2005b）。この記述では、「ローカルヒーロー」はアメリカ映画のタイトルから流用した用語であるとされる。

ローカルヒーローの発想の根幹に日本の大手テレビ番組のヒーローが存在するのは疑いのないところだが、その名称はまた別のルーツを持つという興味深い証言といえる。ところが、「自主制作ヒーロー」という呼称とも並存したとされることから、この時点では二つの呼称は近い意味を持っていたと考えられる。80年代前半には、現在の様に「地域のヒーロー」の意味での「ローカルヒーロー」というキャラクターコンテンツの概念はなく、自主制作ヒーローの語が示す通り、「自分達のヒーロー」を意味する概念として使用されていた節がある。

地域性

現代のローカルヒーローが持つ地域性は、80年代には見られたという。「カゴシマン」も名称からして地域色を打ち出しているが、具体的な地域活動につなげた事例として、大分県日田市にて1983年から活動を開始した「故郷戦隊ヒタシマン」が挙げられる。元々は70年代のアニメ作品のコスプレをしていたメンバーが母体となり、「高い金を払ってヒーローショーを呼ぶくらいなら自分たちで」という動機から活動を開始したという（ブルー・オレンジ・スタジアム2006:90）。市民の理解が中々得られず活動を縮小していたものの、2000年代には他のローカルヒーローとの接点を持ってコラボイベントに参加し、活動を継続していた団体であり、また「ただのコスプレは市民権を得られない。地域のために動いてこそローカルヒーロー」との思いから、清掃など地元のボランティア活動を中心に実施していたという（ブルー・オレンジ・スタジアム2006:90）。活動の発端が大手ヒーローの代替であり、しかし地域色を取り入れて独自のヒーローを作ったこと、市民の理解を獲得するための努力を継続したことが記述されており、こうした公共性の強い活動内容は後のローカルヒーロー活動の先駆といえるだろう。

ステージショー

ステージショーは、ローカルヒーローの代表的な活動のひとつである。大手テレビ番組のヒーローにおいては、活劇を展開する形式のステージショーが1970年代前半には各地で盛況となっていたという。一方でステージショー独自のヒーローも70年代前半には存在したという。2006年に刊行された『ローカルヒーロー大図鑑』では、宮城県において1973年に活動した「レインボー・アタックエース」が、仙台のデパート「エンドーチェーン」とタイアップし活動していたとする（ブルー・オレンジ・スタジアム2006:101）。この他、1980年にステージショーに登場していた「スピリッツマン」という着ぐるみヒーローが、大手テレビ番組のステージショーにおいてサポートヒーローとして登場したとされ（裏庭映画保存会2015）、これを初期のローカルヒーローとする意見もある（超級バラエティ研究所2016）。大手テレビ番組のステージショーでも、運営する催事会社が用意した独自のキャラクターが登場する例は近年もあり、スピリッツマンもその一例であるのなら、こうしたヒーロー達はステージショーの黎明期から今日まで、相当数存在してきたと推察される。

以上のように、80年代前半までの時期に、自主製作映画、コスプレ、ステージショーといった活動の中から、大手テレビ番組に登場しない独自のヒーローの制作が開始され、現在のローカルヒーロー活動の要素が生み出されてきたと推察される。こうした活動が母体となったのは、着ぐるみ制作、ストーリーや殺陣の組み立てや見せ方といった、キャラクターの制作と運営に係る専門技術とノウハウを有していたからであろう。インターネットやSNSが発達する以前、ヒーロー活動を支えるこうした特殊技術は今日ほど一般的でなく、一部のプロ以外には共有されていなかった。合わせて上述のヒタシマンの実例に見るように、著作権や費用の問題で大手キャラクターを使用できないという事情から、いわば代替の必要性もあったことがうかがえる。

また大変興味深いことに、これらローカルヒーローが擁する諸要素は分散して育まれていたと考えられる。「ローカルヒーロー」という用語は自主制作映画の制作集団が使い始め、地域と触れ合う能動的活動はコスプレイヤーたちが行い始め、今日多くのローカルヒーローが実施するステージショーの要素は大手テレビ番組のショーを担う団体によって培われていったと推察される。全てのローカルヒーロー活動がこの3ジャンルに端を発すると説明できる訳ではないが、これらの中で醸成された諸要素が複合されることで、今日のローカルヒーロー活動が形成されていったのではないかと³⁾。そして着ぐるみの造形やステージの運営といったヒーロー活動を支える諸々の専門技術も、こうした活動を経て拡散されて行ったと考えられる。

3-2. ローカルヒーロー概念の成立

現在一般に想起される形で「ローカルヒーロー」の活動が広がり始めるのは、1990年代後半から2000年代にかけての時期と推察される。TV、雑誌などマスコミが注目し始め、「ローカルヒーロー」「ご当地ヒーロー」といった名称で、地域を意識し、活動の中に積極的に取り込んでアピールする活動が広く知られるようになる。地域キャラクターコンテンツとして、地域貢献のユニークなボランティア活動として取り上げられるようになり、現在に繋がる意味合いの変化が生じ始めている。

ただ上述の通り、この時期より前から地域を意識した先駆的活動を展開するヒーローは存在していた。にもかかわらず90年代に入ってから注目を集め始めた理由は何であろうか。本稿では3点指摘しておきたい。ひとつは、ヒーロー活動の増加である。先行研究で指摘した通り(石井2015:124 図2-1)、現在と比べると増加率は低調ではあるものの、80、90年代を通じて独自に制作したヒーローを擁する団体が各地に登場している。彼らの活動によって、広く社会的注目を集めるようになった可能性が考えられる。

また自分達のキャラクターを用いたステージショーを積極的に実施する団体の登場も注目を集める契機になった可能性があるだろう。80年代前半にも独自制作のヒーロー活動は存在したが、

大手テレビ番組のステージショーにおける脇役や、限定されたメンバー内で完結してしまう傾向が強い自主制作映画やコスプレのイベントでの活動が主であった。しかし地域の祭事などで公開されるステージショーでは、自分達のヒーローでも主役となり得、またヒーローショーに対する興味の有無にかかわらずその場にいる全ての人々の耳目に届く開かれた性格を持つ。こうした開放的な活動が積み重ねられたことで、社会的認知が拡大していった可能性が考えられる。

そして自分達の趣味として完結するのではなく、「地域貢献」を目的として掲げる団体の存在も、この時期に注目を集めた理由の一つとして挙げられよう。当時のマスメディアの取り上げ方は、地域貢献という公共の利益に繋がるテーマを持っていることや、ボランティア活動であり社会人や学生たちが都合をやりくりしながら活動していることを強調している。元々は趣味で始めたことだとスタッフがインタビューに答える様子も報道されている（鹿児島・鹿児島読売テレビ2000）が、活動における趣味性や自己満足の要素は、暗黙の了解であるという意味も含めて、強調されない。「観光の低迷や過疎化、若者の都会志向などから郷土を守るのが使命」であるとうたい（テレビ東京2000）、地域のイベントに参加する様子や交通整理を行う様子がテレビ放送され、当事者達が反響の大きさに「びっくりしている」というコメントが報道されている（鹿児島・鹿児島読売テレビ2000）。ステージショーのアクションや造形を称えるコメントも見られ、（思ったより）出来がよいという意外性も喧伝されている。一方で、生真面目な社会活動の紹介というより、ある種の嘲笑を称えて報道された向きがあったのも事実であろう。

この時期、団体数の増加、ステージショーによる地域内での認知拡大に加え、全国放送も含めテレビ、雑誌といったマスメディアに取り上げられたことで、ローカルヒーローの存在はかつてない規模で周知されていく。しかし上述の通り、そこに嘲笑を伴うある種のバイアスを持って周知されたことで、全ての団体に当てはまる訳ではないが、「大手テレビ番組のヒーローと異なる」「地域貢献のためのボランティア活動」「親近感」「手作り感（不出来）」が特色となるローカルヒーロー像が構築されていったのではないだろうか。

3-3. ローカルヒーローの増加と更なる変化

ローカルヒーローが現在に繋がる意味での地域キャラクターコンテンツとして認識されていく中、新たな動きが発生する。先ず2000年代前半に結成数が急増している（ブルー・オレンジ・スタジアム2006: 98-99, 石井2015: 124 図2-1）。その背景にはローカルヒーローの全国的な知名度の広がり指摘できよう。マスメディアの報道の中で、明るく楽しい開放的な地域貢献活動であり、商業主義でないボランティア活動であるというローカルヒーローの陽性のイメージが強調されたこと、そしてキャラクターコンテンツに関する専門職に就いていなくてもヒーロー活動は始められる前例として広く宣伝されたことも、拡大に拍車を掛けた可能性がある。

またこの時期以降は自然発生的な活動ではなく、先例を踏まえ情報を集めてから活動する例が多くなり（海老名 2009: 62, 山口 2013: 16）、場合によっては他団体から技術や情報の提供を受けて活動する例も見られる⁽⁴⁾。これは同時にそれまで限定的局所的だった技術の拡散も意味しており、SNS 時代を迎えてさらに拍車がかかることとなる。90年代までの試行錯誤の先行者達を経て、第二世代ともいべき段階に入ったことがうかがえる。

さらに今日のローカルヒーローに繋がる要素として、市民活動、商工会、営利企業、地方局でのテレビ番組制作など、すでに活動母体の多様化が発生しており興味深い。その背景には結成数の増加があるだろう。そして多様化を受けて、既にこの時点でローカルヒーロー全体に当てはまる定義付けは難しくなっており、先行して全国に流布されていたイメージを覆す活動も見られるようになる⁽⁵⁾。中には大手テレビ番組に引けをとらない高いクオリティの着ぐるみやステージショーも増加し始める。またローカルヒーローはボランティアであるという固定概念を転換し、地域ビジネスとして成立させるための経済活動も開始されている（海老名保 2009）。

さらにコラボイベントが開始されたのも 2000 年代以降と考えられる（石井 2018）。同様のイベントには先例があり、90年代には自主製作映画のヒーロー団体によるコラボイベントにて、上映会と共にキャラクターのステージショーも行うイベントが開催されている（RAPID PROGRESS 2017）。ローカルヒーローのコラボイベントは、2001年に長崎県平戸市にて開催された「ローカルヒーローフェスティバル in 平戸」が嚆矢とされ（ブルー・オレンジ・スタジアム 2006: 100）、2002年には沖縄県南風原町にて「第2回ローカルヒーローサミット in はえばる」が開催されている。両イベントは連続しており、九州・沖縄地域の団体が主であった。一方で、東日本地域の団体が主となる 2004年には長野県下條村にて「ローカルヒーロー大集合！」が開催され、今日まで継続されている。前号にて指摘した通り、こうしたコラボイベントの開催には開催地近隣に相当数の団体が存在している必要があり、2000年代の急増を背景に開催が可能になったといえよう。

3-4. ローカルヒーローの発展

2000年代後半以降も結成数の増加が続いており、連動して全国各地で継続的かつ大規模なコラボイベントが開催されている。2007年には大分県にて「九州ローカルヒーローフェスタ」が開催され、2012年まで継続している。また2009年には岩手県にて「IWATE ハチマンタイダイナマイト」が開催され、2017年まで継続している。ローカルヒーローの全国的な広がりを背景に、イベントの開催も全国化していることがうかがえる。

この時期はクオリティの向上も継続し、ハイレベルの着ぐるみやアクション、ヒーローに対する哲学やポリシーを備えた団体が更に増加し、多様化している。こうした変化は、2006年と

2013年に刊行されたローカルヒーローの網羅的書籍を比較すると明瞭に浮かび上がってくる。上述した2006年刊行の『ローカルヒーロー大図鑑』には、「ショーを盛り上げるヒーロー流格闘パターン」や「本格派ヒーロー直伝のキメポーズ」、「マニアなあなたにマスクの作り方」というコラムが掲載されていた（ブルー・オレンジ・スタジアム2006: 58-59, 67, 96）。本書刊行の時点では、ローカルヒーローは素人でも作れるものとして位置づけられていたことをうかがわせる。しかしこの図鑑に掲載されたヒーロー77組のうち、掲載された手法でマスクを造形していると推察される団体は22組を数えるのみであり、既製のヘルメットやパーティグッズなどを流用したヒーローの方が多く掲載されている。ところが2013年に刊行された続巻である『超ローカルヒーロー大図鑑』には製作技法などを紹介するページは無く、より高度な技術を組み合わせで造形された着ぐるみを用いた活動の紹介が多数を占めており、既製品を用いたキャラクターの掲載は153組中10組程度に過ぎない。

こうした流れを受けて、既存のローカルヒーロー像への挑戦や再構築、自分達の活動との差別化を意図した動きも開始される⁽⁶⁾。中には地域色を薄め、純粋な格好よさやクオリティの向上に注力し高めようとしたヒーローの模索も行われている。そして90年代後半から緩やかに形成されてきた概念や活動のあり方に更なる変化が加わる。それまで多くを占めていた、身の回りの道具や衣装を工夫した着ぐるみや、見よう見まねのアクションでは不十分と見なされるようになっていくのも2000年代後半からであろうと推察される。新興団体だけでなく、既存団体もリニューアル、バージョンアップを模索していく流れがあることは、先行研究でも指摘されている（ローカルヒーロー研究会2013: 130-131）。コラボイベントなどを通じて他団体のヒーロー活動を実見し、ヒーロー団体の横のつながりが強まることで、技術や運営ノウハウの交流、時にはスタッフの派遣といった動きも盛んに行われるようになっていく。

こうした流れをよく表したものとして、ローカルヒーローの運営を行っている『ローカルヒーロースクランブル!』HPの一文「ヒーローの窓口」を引用しておきたい。

「ローカルヒーローは、全国放送のヒーローを真似たものと思われがちですが、現在では「作品」としてサブカルチャーから、一つのコンテンツとして歩み出しております。過去には簡便な衣装を用いて自治会や青年会での手作りの良さを前に出し表現する団体もありますが、最近では、作品表現の為に衣装（コスチューム）も芝居（アクション）も、クオリティの高い団体が様々な地域で活動を拡大しています。結果、多くの遊園地・商業施設・商店街・ローカル局、あるいは道徳やマナーを子供に教育したい自治体や防災・防犯組織などが、ローカルヒーローの魅力をいち早く気付き活用されております。これからも、もっと多くの方々に様々のローカルヒーロー達の思いが届くことを願っております。」（株式会社ジョイス）

近年の動向を簡潔明瞭にまとめたこの文章でも、ローカルヒーローのクオリティの向上が指摘

されている。これは一面においてはローカルヒーローの進化、発展と見ることができるだろう。一方で、不出来から来る親しみやすさが希薄になるだけでなく、デザインにおいても素材においても大手テレビ番組のヒーローに似通う方向性が看取される。結果として、余暇に行われるボランティアとしてはまかなえる限界を超えざるを得ないことにも繋がっており、現在多くの団体が共通して抱えている技術、経済面の負担が顕在化していくことになる。

そして2011年3月の東日本大震災をはじめ、2010年代に入って多発する災害は地域キャラクターであるローカルヒーローの活動に様々な影響を及ぼしている。特に東北地方を中心に、震災を契機に創始されたローカルヒーローが多数確認される。支援活動の試みだけでなく、災害に直接関わる内容のステージショーを展開するなど、ローカルヒーローならではの動きも見られた。一方で震災前から活動していた団体の中には、活動を転換していく動きも見られる（NPOいわて・郷プロジェクト2011、マブリットキバオーナー2013）。

3-5. 現在のローカルヒーロー

2010年代後半に入っても全国的な広がりには継続しており、総数のさらなる増加が進んでいる。また活動の多様化も更に進行しており、これまでに無い個性的な団体も多く登場し、沈静化していたマスメディアへの露出が再燃する状況も見られる。現在のローカルヒーローの一つの特徴は、既存の概念やカテゴリー分けにこだわらず、自由な発想と行動力で新たな活動を生み出していることにあるといえよう。ステージショーの中で活劇を披露せず、歌やダンスに注力する活動や、そもそもステージショーを実施せず、社会奉仕に専念する活動も登場している。またローカルヒーローはヒーロー側にキャラクターが偏りがちであるという状況を踏まえて、悪役を専業とする団体が90年代に創始され、その数を増やして現在に至る。

コラボイベントも増加しており、それまで開催例の無かった近畿地方や北海道でも、「大阪ジャスティス」（2013～2016年）や「北海道ヒーローサミット」（2015年～）といったイベントが開催されている。また大規模化イベントの登場は特筆すべきといえる。2014年から千葉県で開催されている「日本ローカルヒーロー祭」は他と比して圧倒的な規模のコラボイベントであり、詳細は前号（石井2018）に譲るが、近年はローカルヒーローだけでなく、積極的に「ゆるキャラ」や「ローカルアイドル」といった他の地域キャラクターコンテンツの参加を受け入れている点は注目される。これは本イベントに限ったことではなく、福島県にて開催された「しらかわキャラ市」（しらかわキャラ市実行委員会2018）の様に、元々は「ゆるキャラ」を主体としながらローカルヒーローも招致するようになったイベントも開催されている。

コラボイベントだけでなく、ヒーロー活動を主軸に据えつつ、柔らかい魅力を備えた可愛らしいキャラクターや素顔のアイドルを、他団体とのコラボで招致するのではなく、団体内のレギュ

ラーメンバーにする例は明らかに増加傾向にある。その背景には、客層の限定を避け、幅広い層へのアピールを可能にする工夫の一つだと指摘できよう。一方、クオリティの高い活動が当たり前になった現在、技術や経済面の負担も引き続き大きな課題となるだろう。

また海外にも自主制作映画の歴史は存在するが、海外からローカルヒーローとして日本のイベントに参加する例も登場するようになった。2018年9月開催のコラボイベント「日本ローカルヒーロー祭」ではフランスと香港からの参加者があり、SNS時代を背景にネット上でも海外から熱心なやり取りが行われている。日本のサブカルチャーが以前から知られ親しまれてきた地域を中心に、今後も継続する動きであろうと予想される。

4. 考 察

以上、おおむね80年代以降のローカルヒーローの流れについて、大きく5つの時期区分を設けて分析した。全体を俯瞰しつつその傾向について考察を加えてみたい。

ローカルヒーローを構成する主要素は、1980年代までに大手テレビ番組のステージショーや自主制作映画、コスプレの中で生まれ、総合化されていったと推察される。現在のローカルヒーローイメージが形になるのは90年代後半から2000年代にかけての時期であり、マスメディアの注目もあって話題となり、急増していくこととなる。一方で多様化も発生し、「親しみのある地域貢献のボランティア活動」イメージと異なる内容の活動も増加していく。

また全体としてクオリティの向上が目指され、現在に到っていると考えられる。ただしここでいう「クオリティの向上」は、往々にして大手テレビ番組のヒーローのクオリティに近づくことを意味しがちである。デザインのあから様な模倣や踏襲の例は減少しているものの、造形物の素材やアクションといった部分ではこうした傾向が強まっていることがうかがえる。しかしその結果として、大手企業によるハイリスクハイリターン運営形態は踏襲できないことから、経済面をはじめとする負担、課題も生じていると推察される。造形や殺陣といった専門技術無しでローカルヒーローを始めようとした場合、他団体に比して遜色ないクオリティを得、かつ維持しようとするれば相当な負担が発生するであろう。2000年代には無かった事態が生じている現状がある。

また現在も進行している「ローカルヒーローの地域離れ」(石井 2015)は、同時に原点のひとつである80年代の自主制作映画のヒーロー概念である「自分達のヒーロー」に回帰しているとも取れる。2010年代以降、新たな段階に入ったことは間違いないが、そこには2000年代に盛り上がり培われたイメージを解体し、ローカルヒーローの創始以前に戻る方向性が潜んでいるのではないだろうか。

5. 小 結

ローカルヒーローは、様々な要素が絡み合いながら、その意味、概念を変化させつつ今日に到る。本稿ではなるべく単純化して論じたつもりであるが、それ故に触れられなかった要素も少なくない。例えば、ローカルヒーローの歴史において大手テレビ番組やパロディ作品の動向は少なからず影響を及ぼしていると推察される。また歴史を述べるにあたり、ローカルヒーロー概念の展開とかかわりを持つ呼称の問題にも本稿ではそれ程触れられなかった。ローカルヒーローの創始と多様化において重要な意味を持つと推察されるが、これらは今後の課題としたい。

《註》

- (1) この他、簡潔な文章ではあるが全体史を概観したものとして、ローカルヒーローの合同イベントである「ローカルヒーロースクラムブル！」実行委員会の榎井啓人氏による一文が挙げられる。TVヒーローが少子化を背景に高級なコンテンツとなる中で、日本のアニメと特撮が評価され活発化していったこと、先ず「コスプレ」が各地のロケーションと結びつきブームを起し、「ゆるキャラ」と称されるキャラクターが多出する中で、ローカルヒーローは「コスチュームのクオリティ向上はもとより、「勧善懲悪」というストーリー形式から様々に発展し、活劇、歌、舞踏、似顔絵、映像、コスプレパフォーマンス等さらに幅を広げながらますます活発に活動」していることを指摘する。合わせて、知名度や後ろ盾の無い中で多くのキャラクターが出演の努力を続け、大規模な有料興行まで可能になったという、発展の歴史についても言及している（榎井 作成年不明）
- (2) 宮城県において1973年に活動した「レインボー・アタックエース」と、鹿児島県において1984年に制作された「爆煙仮面カゴシマン」をローカルヒーローの始まりとしている（ブルー・オレンジ・スタジアム2006:101）。その理由として、前者は仙台のデパート「エンドーチェーン」とのタイアップを売りにしていたとされ、後者は「ローカルヒーロー」を初めて名乗ったことを挙げている。
- (3) 上述した「カゴシマン」は映画上映後に反響があり、地元で実演が行われたという（扶桑社2009）。また80、90年代に行われた自主制作映画のヒーローのコラボイベント「インディーズヒーローフェスティバル」ではステージショーも実施されている（RAPID PROGRESS 2017）。

「カゴシマン」のスタッフと共にヒーロー活動を行い、現在は鹿児島のローカルヒーロー『薩摩剣士隼人』の監督を務める外山雄大氏は、元々ヒーロー好き、特に制作側に興味があった中で、中学校2年生の時（1980年代前半）にアニメのヒーローに憧れ、自分で着ぐるみを作り学校で演じ始めたところ評判となり、町内会の夏まつりをはじめ、地元から離れた地域の催事に呼ばれるようになったという。更にプロのキャラクターショーのアルバイトをしつつ立ち回りを学んだという（鹿児島市広報課2005:12, ログミー2014）。活動のきっかけとなったアニメのヒーローは、紹介記事（ログミー2014）の掲載写真から、1983年～85年にかけて『週刊少年ジャンプ』に掲載された「ウイングマン」（桂正和作）と東映動画によるアニメ化作品「夢戦士ウイングマン」と推察される。コスプレイヤーを題材とした大手作品に影響された点で間接的ではあるものの、ローカルヒーローの歴史が始まったと推察される1980年代にヒーロー活動を始め、ステージショーのノウハウを加えて発展させていった外山氏の活動は、上述した複数のジャンルを架橋し総合化した好例といえよう。

- (4) 「カゴシマン」は、1999年8月から活動を開始した同じ鹿児島県内のローカルヒーロー「離島戦隊

- タネガシマン」に造形技術の指南を行ったという（扶桑社 2009）。
- (5) 一方で、流布された「ローカルヒーロー」イメージに対して、先行して同じ用語を使用していた既存団体からは区分けの動きも見られるようになる。上述した自主制作映画のヒーロー「爆煙戦士カゴシマン」のスタッフも合流して、2004年からMBC南日本放送で放送された「オモチャキッド」のスタッフの証言には、「オモチャキッド」はローカルヒーローではない。と、いう事があります。代表は「むしろ、インディーズヒーロー」と、話しております。」（「オモチャキッド」制作スタッフ BLOG 2005）とあり、使用における区別が伺える。
- (6) 例えば、茨城県を中心に2007年から活動している『時空戦士イバライガー』の公式HPには「ご当地ヒーローの常識を超えた「本物」という文言が見られる（茨城元気計画「イントロダクション」）。運営母体である「茨城元気計画」のパンフレットには、「時空戦士イバライガー」は、茨城県のご当地ヒーローとして紹介されることが多いですが、正確にはヒーロー好きの仲間たちによる自主活動であり、県、市町村等の公式キャラクターではありません。各地のご当地ヒーローは、その地域のまちおこし団体などが主催運営していることが多いですが、イバライガーには、そうした母体がありません。ヒーローが好きだから、やりたいからやっている完全な自主活動で、結果的に地域のヒーローとして認めていただいているわけです。」（茨城元気計画「志パンフレット中面」）とされている。

引用・参考文献

- 石井龍太（2015）「多様化するローカルヒーローの認識と実態」、『城西大学経営紀要』（11）：109-132
- 石井龍太（2016）「ローカルヒーローのステージショーに関する現状分析」、『城西大学経営紀要』（12）：127-144
- 石井龍太（2017）「ローカルヒーローによる教育実践の検証：城西大学経営学部石井龍太ゼミナールの事例から」、『城西大学経営紀要』（13）：115-143
- 石井龍太（2018）「ローカルヒーローの「コラボ」にみる現状と課題 コラボイベントとコラボショー」、『城西大学経営紀要』（14）：81-102
- 井上大次郎（2017）『父ちゃんは弱っちいヒーロー：未来に希望を！子ども達に笑顔を!!』amazon Kindle
- 茨城元気計画「イントロダクション」『時空戦士イバライガー公式HP』<http://www.ibaliger.com/intro.shtml>（最終閲覧日 2019年1月6日）
- 茨城元気計画「志パンフレット中面」『時空戦士イバライガー公式HP』<http://www.ibaliger.com/kikaku/iba-naka-vr2.pdf>（最終閲覧日 2019年1月6日）
- うるの拓也（2013）『時空戦士イバライガー Vol.01』うるのクリエイティブ事務所
- 海老名保（2009）『奇跡のご当地ヒーロー「超神ネイガー」を作った男～「無名の男」はいかにして「地域ブランド」を生み出したのか～』WAVE 出版
- 裏庭映画保存会（2015）7月3日 Twitter 記事 <https://twitter.com/uraniwamoviecom/status/617271843423023104>（最終閲覧日 2019年1月3日）
- 「オモチャキッド」制作スタッフ BLOG（2005a）7月19日「鹿児島特撮映像研究団体（鹿特体）の岩崎です」（<http://omochakid.blog12.fc2.com/blog-entry-14.html>（最終閲覧日 2019年1月3日））
- 「オモチャキッド」制作スタッフ BLOG（2005b）8月13日「これが伝説のローカルヒーロー、カゴシマンだ！」（<http://omochakid.blog12.fc2.com/blog-entry-42.html>（最終閲覧日 2019年1月3日））
- 鹿児島市広報課（2005）『市民フォト鹿児島』102
- 鹿児島・鹿児島読売テレビ（2000）12月29日「ズームイン朝」<https://www.youtube.com/watch?v=68vDB6AIHpk>（最終閲覧日 2019年1月4日）
- 株式会社ジョイス「ヒーローの窓口」『ローカルヒーロースクランブル』<http://l-hero-s.wixsite.com/l->

- hero-s/blank (最終閲覧日 2019年1月8日)
- 城西大学経営学部石井龍太研究室 (2016a) 『ローカルヒーロー通信』(1)
- 城西大学経営学部石井龍太研究室 (2016b) 『ローカルヒーロー通信』(2)
- 城西大学経営学部石井龍太研究室 (2017) 『ローカルヒーロー通信』(3)
- 超級バラエティ研究所 (2016) 8月8日「昭和ボカンシリーズとコスプレの関係」『超バラ研：日記』
<http://d.hatena.ne.jp/qvarie/searchdiary?word=%A5%EC%A5%A4%A5%F3%A5%DC%A1%BC> (最終閲覧日 2019年1月3日)
- テレビ東京 (2000) 12月27日「ワールドビジネスサテライト」<https://www.youtube.com/watch?v=qw4Ks6WUFPg> (最終閲覧日 2019年1月3日)
- 特定非営利活動法人 HERO (2017) 『RYU PROJECT～震災のあの日から～』金港堂出版
- 扶桑社 (2009) 7月16日「ご当地ヒーロー発祥地は、鹿児島だった！そして本当の元祖は!?!」『日刊SPA!』<https://nikkan-spa.jp/1106> (最終閲覧日 2019年1月4日)
- ブルー・オレンジ・スタジアム (2006) 『ローカルヒーロー大図鑑』水曜社
- マブリットキバオーナー (2013) 「マブリットキバがヒーローをやめた日」『ジオラマ製作と誰かのために 応援コミュ』<https://plus.google.com/102177105988330197362/posts/E9tnTHsPMcA> (最終閲覧日 2019年1月10日)
- 山口真一 (2013) 『翔べ！カッセイカマン——ローカルヒーローの聖地信州・下條村の逆風への挑戦』ほおずき書籍
- ヤツルギ魂編 (2015) 『2015 日本ローカルヒーロー祭公式パンフレット』
- ヤツルギ魂編 (2016) 『2016 日本ローカルヒーロー祭公式パンフレット』
- ヤツルギ魂編 (2017) 『2016 日本ローカルヒーロー祭公式パンフレット』
- 愉井啓人「本催しについて」『ローカルヒーロースクランブル!』<http://1-hero-s.wixsite.com/1-hero-s/description> (最終閲覧日 2019年1月10日)
- ローカルヒーロー研究会 (2013) 『超ローカルヒーロー大図鑑』水曜社
- ログミー (2014) 8月9日「ウルトラマンにあこがれて…ヒーロー番組を自ら立ち上げた男が語る、ドキドキし続ける生き方 ふるさとのヒーロー夢を見るチカラ #1/2」<https://logmi.jp/business/articles/18768> (最終閲覧日 2019年1月4日)
- NPO いわて・郷プロジェクト 2011 「これからのマブリットキバの動きについて」「マブリットキバ公式サイト」<http://maburittokiba.web.fc2.com/msg3.html> (最終閲覧日 2019年1月10日)
- SION/TC エンタテインメント (2008) 『ローカルヒーロー大百科』(DVD 作品)
- RAPID PROGRESS (2017) 『インディーズヒーローフェスティバル 2』<https://www.youtube.com/watch?v=LunuBpvioXw> (最終閲覧日 2019年1月5日)

A Hypothesis on the History of Local Hero

About the changes of their concepts and activities

Ryota Ishii

Abstract

One type of regional character, the “Local Hero” has historically been developed since the 1980s. I analyzed how the various elements of the Local Hero, such as title, stage performance, and way of presenting local color, appeared and developed through time. In doing so, I came to think that these features were first born in the stage versions of the heroes of major television productions, in independent movies, and in cosplay related activities. By the early 2000s, Local Hero performance that connects to the modern phenomenon emerged. Then, in line with the rapid increase in their numbers, the second half of the 2000s saw a diversification of the form, with examples that challenged the concept that had been prevalent to that point emerging, a phenomenon that continues to this day.

Keywords: Local Hero, History, Concept, Activity